

## 春期福音特別集会（1）（京都）

## 汝我と共に（1）

## ——詩篇第23篇——

1975年5月3日

小池辰雄

詩篇第1篇 二元的な思想 神こそはわが牧人 羊ごころ 神と一対一 聖名のゆえにこそ  
我なんじと共に 過去と未来の現在化 死の関門も突破 油注がれたる者 聖霊のバプテスマ  
われという酒杯 十字架という門に体当たり 二即一の信交の世界 我は神の宮とならん 現  
在化と天国化 絶対的なものにしがみつかなくては 祈り

## 【詩篇23】

## ダビデのうた

- 1 エホバは我が牧者なり、  
われ乏しきことあらじ。
- 2 エホバは我をみどりの野にふさせ、  
いこいの水濱<sup>みぎわ</sup>にともないたもう。
- 3 エホバはわが靈魂<sup>たましい</sup>をいかし  
名のゆえをもて我をただしき路<sup>みち</sup>にみちびき給う。
- 4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害<sup>わざわい</sup>をおそれじ。  
なんじ我とともに在<sup>いま</sup>せばなり。
- 5 なんじの咎<sup>しと</sup>なんじの杖われを慰む。  
なんじわが仇<sup>あだ</sup>のまえに我がために筵<sup>えん</sup>をもうけ、  
わが首<sup>かしら</sup>にあぶらをそそぎたもう。
- 6 わが世にあらん限りはかならず恩恵<sup>めぐみ</sup>と憐憫<sup>あわれみ</sup>とわれにそいきたらん。  
我はとこしえにエホバの宮にすまん。

## 【詩篇23】（私訳）

## ダビデの絃歌

- 1 エホバこそはわが牧人<sup>まかひじん</sup>、  
私は何も困らない。
- 2 若草の野に彼は私を臥<sup>ふ</sup>させ、



憩いの水汀に伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は甦らせ、

義しき道に導き給う、

聖名のゆえにこそ。

4 また縦い死の陰の谷を渉るとも

私は禍害を恐れない。

あなたが共に在り給うから。

あなたの咎、君が杖、それらが私を慰める。

5 あなたはわが眼のあたりに筵を設け給う、

わが諸々の敵前で。

あなたはわが首を油漬けにし給う、

ああわが酒杯は溢れた。

6 誠に善福と恩恵とが私を追跡する、

わが生命の日の限り。

かくて私はエホバの家に住む、

日に日が続き果てるまで。

### ●詩篇第1篇

今日は、古い方も新しい方もいらつしやいますし、第1回集会ですから、あまり奥に入らないで、入り口のお話をします。入り口ですけれども、この入り口は相当奥まで見通しがきくかもしれません。そんな気持ちでお話いたします。

詩篇というのは、ちょうど万葉集みたいで、紀元前約九百年から千年くらいの間に作られたところの詩、あるいはむしろ歌と言った方がいくらいなので、みんなこれは歌われたものです。それを集めて編集した。どんな具合に集まっているかということは今しやべりでしたら大変ですから、それはやめます。いろんな種類の詩篇があつて、分類できるわけです。とにかく、誰が作ったかということは、「ダビデの作」と書いてあるけれども、果たしてダビデであるかということは学問的には決定的には言えない。

「おそらく、原作はダビデであつたらう」

ということはある程度いえるとしても、読み人知らず式な歌がたくさんあるわけです。第1篇はまさにその一つで、誰がつくったか何も書いてない。私が前に訳したがあるので、自分の訳を読ましていただきます。

### 【詩篇1】(私訳)

「さいわいなる哉、この人！ この人は

悪の徒の謀略に歩まず、



罪びとの途にも立たず、  
嘲者の座にも坐らず、

こういう訳し方をしたのは、私は原語に言葉の配置も、また韻律の関係でも、なるだけ合  
わせるつもりで、そんな訳し方をしたわけです。

2 反つて、エホバの法にこそ、

その歓喜があり、

聖法をば憶う昼も夜も。

3 その存在は木にぞ似る、

水の流く辺に植えられて、

その期到らばその実を結び、

その葉もまた凋落むなき。

かるがゆえそのなすところみな栄えゆく。

4 然かはあらず、かの悪の徒は。

むしろ似る、風の吹き去る粉殻に。

5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、

また罪びとは義人の集いに。

6 宜べ、エホバは義人の道を知り給う。

されど、悪の徒の途は亡びる。

これは非常に私は苦心しました。ヘブライ語は、強音が3・4あるいは2・3というような  
ぐあいに詩の形ができてまして、その強音に沿うように訳してみた。自分としては、この  
詩篇第1篇の訳は、ある意味において、傑作だと思っているんですが。

## ●二元的な思想

ここでは、善と悪、特に義と悪が非常に対立している。イスラエルの宗教は、光と闇、義と罪、  
善と悪、そういうような対立の意識が非常に強い。だから、天国と地獄。はつきりと神に  
つく人となるか、サタンの手下となるか。栄えるか、滅びるか。こういう非常にはつきり  
した二元的な思想です。今でもユダヤ人はそれが強い。

「悪の徒」(レッシュヤイーム)とは、非常に多く出てくる言葉ですが、「義人」に対するもので、  
「悪」というのはただ道徳的に悪というばかりでないので、「神を信じない」ということが「悪  
人」、あるいは「愚かなる者」。「悪しき者」とか「愚かなる者」というのはまず第一に根底  
的には

「神を信じない、神にそむく者」

それが一番根本的な気持だと思っています。

それから、「罪びと」(ハッターイーム)という言葉が出てきます。もちろんこの場合の「罪



びと」というのは新約的な意味における罪びとではありません。律法、モーセの十誡およびそれから派生するところの律法を犯し、犯すことを常習としているような者、そういったのがこの「罪びと」です。

「嘲る者」(レツィーム) というのはもちろん、神に対して不虔な者、敬虔でない者。神聖なものや真理に対するとところの嘲りの気持。『ファウスト』でいうと、メフィストフェレスみたいなのがこの「嘲る者」——メフィストフェレスはただ嘲りばかりではないけれども——ちよつとそういうことが連想されるわけです。もう少しはつきりいいますと、神の霊の敵、サタンと同質なもの。サタンは非常に嘲りまた誘惑し、また偽装をこらす者ですが、かなり近代的な性格ですね、この「嘲る者」というのは。ですから、「悪の徒」と「罪びと」と「嘲る者」という三種類の言い方がしてあるのは単に偶然なことではない。これは、神を信ずる者、また信実なる者、砕けたる魂とか、そういうものにみな反対するご連中です。そういうのはみな、風に吹き去られる粉殻もみがらのようで滅びてしまう。神につける者は、そういうものは相手にしない。そういう座に立たないといって、はつきり分けた。

私はこれからにも第1篇の解説をしようと思つてゐるのではない。ユダヤ人の考え方にはそういう非常にはつきりとした、光と闇、義と罪、こういう区別がある。聖書にはまたそれが旧約から新約まで、ある意味において貫いてゐるということが言えるわけです。新約にくるともうひとつ別な角度が出てきますけれども。旧約でも預言者の中には、またそれを贖つていくところの事態がもちろん出ていますけれども。とにかく、ユダヤ人というのはそういうことがはつきりしている。そういう意味においては、日本人はまずこういったはつきりとした相対的な意識を、もつと義しいことに対する厳肅な気持、間違つたことに対するはつきりとした「否いな」ということが欲しいとは思ひます。

### ●神こそはわが牧人

それはまず前提で、今日は第23篇の方。そこに「汝我と共に」という題を出しました。これはあまりにも有名な詩篇で、皆さんもご存じすぎているんですが、私はこの23篇は何度読んでも新しい。詩篇150篇の中で、もしかた一つの詩篇を選べといわれたら、やはり23篇になりそうです。それくらいこの23篇はある意味において福音的な詩篇です。詩篇中の詩篇。たつた6節ですけれども。

こつちに来るときに汽車の中で終わりの方で、私はちよつと歌の本を開いて、「荒城の月」なんていうのを口ずさんでいたんですが、あれは実に単純な譜で名曲ですね。まあ、名曲を三つか五つ小さいのを——たとえば「ローレライ」もそうですが、これはどういうものだから飽きないわけです——そういう万人にうったえるようなものを、まあ三つか四つか五つくらい作つて、もうそれでその人ははつきり人生の目的を達したようなわけです。あの作曲家も若くして死にましたが、永久的なものです。くだらないものたくさん作る



よりもはるかにその方がいいわけで、どうぞ、皆さん、無駄なことをしないように。

23篇がまさにそういう詩篇。これは「ダビデのうた」というんですが、あるいはダビデが作ったかもしれません。ほとんどダビデといっているくらいに、彼にふさわしい歌です。

「ヤーヴェーこそはわが牧人、私は何も困らない。(私訳)

と。「ヤーヴェー」というのは、「エホバ」と前に言ったんですが、今は学問的には、「ヤハウエ」なんていう日本語の書き方があるけれども、どうも私は、「ヤハウエ」なんてのはあまり感心しないので、私は両方とも長くして、「ヤーヴェー」と言っている。日本語にするときには、やはり日本人の発音にしやすいように直していいわけなので、いくら原語に忠実にしようとしたって、これは無理なものはなしなんです。だいたい果たして、「ヤーヴェー」の名前が「ヤハウエ」であつたかは決定的にはわからない。学問的推測にすぎない。「ヤーヴェー」はまあ「エホバ」で結構です。

「ヤーヴェーこそはわが牧人」

これはイスラエルの民が遊牧の民で、牧人と羊の関係が、神さまとイスラエルの民との関係を最もよく表している。これはもう本当に自然なわけです。我々日本人はそれほど牧畜をやらないですから、彼らが本当に身にしみて感ずるほどに我々は感ずるわけにいきませんけれども、しかし、なんと素晴らしい姿だなあと思うわけです。だいたい、キリストのことを「羔羊」というんですから。一切その牧者に任せているわけです。羊は弱い動物ですから。しかも従順である。

「幸いなるかな、柔和なる者。その人は地をつがふ」

という。従順で柔和であるというのが、あの山上の垂訓でも出てくるところの、キリストが非常に評価された在り方です。そういうのが何か弱虫のようで、へたするとクリスチャンもなにかヘナヘナしたようなのが良さそうに思う。そういう意味ではないです、この「従順」というのは。

どんなに強そうな人でも、本当に神さまに従順であるという姿は素晴らしいことです。牧者に本当に従順である、自分を本当に任せる、全託するということは、易しいようで難しい、また難しいようで易しいわけなんです。私たちは一生かかって徹底的に牧者に従順であるということを身につけなければならないわけです。キリストはそれを徹底的に身をもつて行じられたかたです。であるから、キリストを「羔」という。

だから、何も困らないです。

われ乏しきことあらじ

と。私は何も困らない。ヘブライ語の形からいうと、「困らないであろう」という言い方になっているけれども。未完了の形だけれども、そんな未完了というものをただ日本語で、「であろう」なんて訳したらダメなんです。私は、「困らない」と訳す。



## ●羊ごころ

ギリシア語やヘブライ語ができる人はかえって間違える。あまり字義的に忠実にしようと思って、かえってその本義を、本当の響きを失ってしまう。聖書の言葉というものは弾力性がありますから、その奥をちゃんと洞察して、言葉の現象の奥の根源の言葉をつかむ角度で訳す。

聖書というのは、分かったとしたってダメですよ、言葉の現実の中に自分を入れていこうとして読まなくては。申し上げているとおり、これはドラマですから。ドラマの中に自分を投げ入れて、みずからドラマの中の人となる。動物となつた方がいい。この場合は、我々は羊になってしまう。

「エホバは私の牧者で、私は何も困らない」

と。「羊ごころ」にならなくてはいかん。「従順」なんていうよりか、「羊ごころ」と言った方がいいな。自分が羊ごころになって、ちゃんと牧者がぜんぶ引き受けてくれる。そのことがちゃんと書いてある。

<sup>2</sup> エホバは我をみどりの野にふさせ、

いこいの水濱<sup>みぎわ</sup>にともないたもう。

<sup>3</sup> エホバはわが靈魂<sup>たましい</sup>をいかし

名のゆえをもて我をただしき路<sup>みち</sup>にみちびき給う。

「<sup>2</sup>若草の野に彼は私を臥<sup>ふ</sup>させ、

憩<sup>いこ</sup>いの水汀<sup>みぎわ</sup>に伴れゆき給う。」(私訳)

と。この詩篇はみな単数です。「我ら」という言葉がない。みんな「私」なんだ。

羊なんていうのは群れではないですか。民主主義というのは「群れ主義」になるんだ。衆愚主義。民主主義なんていうとみんな数をたのんでやっている。あの「団交」とか何とかがいつて。「団交」なんて言ってきたら、

「二人びとりとなら話すけれども、複数だったら私は相手にしない」

とはつきり断れればいい。一対一。こつちが二人なら、向こうも二人。それくらい大学の教授は、はつきりと学生をピシャツとやっていかななくてはならないわけです。

私は大学でも、「宗教の時間」は百人ほど聴いているけれども、ぜんぶまず立たせてしまう。ちゃんとお辞儀して、それから授業にかかります。私はそういうところは厳しいですから。遅れて入ってきたら、必ずそこでもってお辞儀をしなければ席についてはいかんと。

今は非常に乱れているね。私は東京の電車に乗ってしゃくにさわるのは——わざわざ私はシルバーシートのある車両に乗ると——老人がいてもだいたい若いのが平気な顔してふんぞりかえっている。また老人も遠慮して他へ行ってしまうんだ、遠慮することはない。私は今まで二度、

「すまないけど、私に腰掛けさせてくれ」



と言った。向こうは変な顔していたけれどもね。ちょっとこちらが若いように見えるものだから(笑)。いざとなったら、ちゃんと私は出すものがあるんだから。無料乗車券というのがある。これはバスはぜんぶ無料です。70歳以上でなければもらえないから。証明してやる。まあそんなことをしたことはないけれども。ああいうことはドイツでは考えられない。若い人が坐って、年寄りや女の方が立っているなんていうことは。ああいう姿をみても、日本はもう精神的に滅びに向かっているなと思う。私は福音にいても、そういうことは厳しいんです。その厳しいところを通らなければ、本当の福音がわからない。

## ●神と一対一

2 エホバは我をみどりの野にふさせ、

いこいの水濱<sup>みぎわ</sup>にともないたもう。

とは素晴らしい句ですね、詩としても。これはもう天国的な姿です。だから、1節、2節、3節は天国なんです。地上における天国の状況。神さまはすっかりしてくださると。そして、緑の野にも憩いの汀にも休ませてくださるし、食べさせてくださる。何も困らない。しかも、これが「我」といつて——羊は群れだけれども、群れだから本当は「我ら」だけれども「我」といつている——この信仰の世界は神と一対一ですよ、まず。

「教会」なんていうと、これは複数なんだ。

「エクレシヤ」「召されたる者たちの群れ」

なんて。けれども、すぐ複数に思うことはない。イスラエルは、「アブラハム、イサク、ヤコブ」と、これはみな単数でありかつ同時にそれは複数の意味をもっていましたけれども、やはり単数が、「一」というものが土台です。

宗教は「一」の世界なんです。この「個」というものをいい加減にしては、これは宗教の世界には本当に入れない。

「まあ、あの人が入ったから、私も」

なんていうのではない。親が信仰があるから息子もというわけにはいかない。これはランケが、

「各時代は神に直結する」

と言ったけれども、各人は神に直結する。一対一で直結ができないようなことであつたらば、これは信仰の世界はいつまでたつてもダメ。ひとごとではないんです。自分なんです、問題は。だから、この詩篇23篇が単数で言っているというところが、非常にその点でいい。一人称・単数。相手も二人称・単数。

## ●聖名のゆえにこそ

「緑の野、憩いの汀<sup>みぎわ</sup>。エホバはわが魂を活かし」



と。何よりも空気は私たちの身体を活かしてくれる。非常に5月は素晴らしい。なんとなく、生き返る。けれども、私たちの魂を活かすものは、これは神さまの霊気の世界。神さまの親しい導きです。

「エホバはわが<sup>たましい</sup>靈魂をいかし<sup>みな</sup>名のゆえをもて我を<sup>みち</sup>ただしき路にみちびき給う」

と。この「聖名のゆえをもて」というのが大事なんです。私の訳では、

1 エホバこそはわが<sup>まきびと</sup>牧人、

私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を<sup>ふ</sup>臥させ、

<sup>いこ</sup>憩いの水汀に<sup>みぎわ</sup>伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は<sup>よみがえ</sup>甦らせ、

<sup>ただ</sup>義しき道に導き給う、<sup>みな</sup>聖名のゆえにこそ。(私訳)

こういうわけです。「聖名」というものが主体なんです。神の名、神名。

昔の作者は、「誰の作」なんて書かない。問題は神さまだけだ。誰が作ろうと、そんなことはいい。詩篇は誰が作ったか、そんなことはいい。むしろ分からなくて結構だと。マルチン・ルターも最初に聖書を翻訳した時に彼は自分の名前を書かなかった。ルターは、もうキリストの名だけだと。彼は確かにそれで非常に義しい角度をもっていた。

だから、「聖名のゆえをもて」と。自分のこつちのためではない。神さまの聖名のゆえに、私を義しい道に導く。聖名は汚されてはいかん。聖名は同時に、

「聖名の栄光のために」

といつてもいいくらいです。

「<sup>ただ</sup>聖名のゆえをもて我を<sup>ただ</sup>義しき道に導きたもう」

と。「義<sup>ただ</sup>しき道」なんて、分からないです、何が義しいのか。神さまが導くところが義しいんです。神さまが導く道が即ち、それが義なんです。そういう「聖名のゆえに」。「日本の名において」とか、「京都の名において」とか、「何々の名において」という言い方をするでしょ。あれが非常に大事なことです。「聖名のゆえをもて」という。これは「必ずその導いてくださるところが即ち自分にとって<sup>ただ</sup>義しい道なんだ」と。

●我なんじと共に

4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも<sup>わざわい</sup>禍害をおそれじ。

なんじ我とともに<sup>いま</sup>在せばなり。

なんじの<sup>しもと</sup>答なんじの杖われを慰む。

「たといわれ死のかげの谷をあゆむとも、<sup>わざわい</sup>禍害をおそれじ」

と。今度は、地獄が来てしまったな。さつきは天国ですよ。



「死の陰の谷」というと正直、死をおびやかされるような所がある。昼なお小暗いような谷がある。非常に際立つた岸壁をもったような谷がある。そこは「ワーディ」といって、あまり水もない。そうするとその陰に猛獣が隠れていたり、盗賊が隠れていたりする。だから、それが「死の陰の谷」なんです。そういう危険な所を歩んでも災いを恐れないと。

「なんじ我とともに在<sup>いま</sup>せばなり」

と。今日の題は、

「汝我と共に」

という。「彼が」ではない。「汝が」です。「彼が彼と」ではない、「彼のために」ではない。

「汝が私と共にいましたもうから」

と。あのモーセが出エジプトをさせられるときに、

「イスラエルの民が苦しんでいる。私はそれを見ているから、助けてやりたい

と思うが、お前は行きなさい」

と。出エジプト記3章です。そしたらば、

「いえ、とても私にはそんなことはできません」

と断った。そしたらば、神さまが

「我なんじと共にあり」

と。これは詩篇の方では、

「なんじ我と共に」

といつて、こちらから告白しているんですが、この出エジプト記3章の方では12節で、

「神言い給いけるは、我必ず汝と共にあるべし。これはわが汝を遣わせる徴で

ある」(出エジプト3・12)

と。なにかお札<sup>ふだ</sup>があるのではない。

「徴は、私がお前と一緒にいるということだ」

と。神さまの方から、「私がお前と一緒にだ」と。23篇の反対です。人間の側から

「汝(神) われと共に」

ですけれども、この出エジプト記の方は、

「我(神) なんじと共に」

です。大事なのは、この「我なんじと共に」という響きを聞くことです。「汝われと共に」というのは、信仰の角度の言葉だね。神さまを信じて、「汝(神) われと共にいますから」と信じかかっている。ところが、その信仰の土台は、「我(神) なんじと共に」です。

預言者は、神の言葉を伝える。上からくる言葉を。祭司は、民の言葉を神に伝える、執り成す。預言者と祭司というのは、そういう役割が違うわけです。預言者は神の言葉を伝える。預言書というのはみなそうです。預言者も単独者で、みんな神さまにとつ捕まえられて、神さまに呼びかけられて、そして神に引つ張り回されながら神の言葉を伝えた。ところが今



度は、祭司は民の言葉を、願いを執り成す。これは下から上です。

### ●過去と未来の現在化

この

「汝(神)われと共に」

というこの信仰の土台は、

「我(神)なんじと共に」

という、その声がその土台であるということを忘れないように。この聖書の宗教は、「啓示の宗教」で、神さまの方から呼びかけ、神さまの方から捕まえかけてきた、そういった立体構造のドラマですから。光が闇の中从上から射しこんでくる。だから、救いのドラマです。その神の救い、神の呼びかけ、神のみ声、それを信じて、「汝われと共に」と。

いわゆる神秘的に神さまの声を聞かなくなっているんですよ。それは聞こえる時もあるさ。聞かなくなっている。それは我々には保証がある、ちゃんと聖書という保証が。聖書というこの歴史的な保証がちゃんとありまして、そして、この聖書は単に歴史的ではない。

聖書の歴史というのは必ず現在化してくる歴史なんです。過去におけるところの神の恩寵は、今もなお同じく働いてくる。その言葉は今なお同じく響いてくる。その響きを、聞かなくなっているんですよ。響いているということを——今ここにテレビがあれば、音楽が響いているんだ。テレビがないから、それが分からない。けれども、テレビがなくても——音楽の響きがあるということを私たちは信ずることができるよう、神の言葉は私たちに来ている。その御手は私たちを捕まえているという、過去の事実が現在も同じくそうであるということを受けとることが信仰なんです。だから、

「聖書は信仰の土台である」

ということとは、ただ歴史的に土台であるということだけではなくて、過去のものは単に過去として終わらなくて、現在でありまた未来にもそうなってくる。だから、聖書の事実というものは、単なる相対的な歴史的な事実とはちがう。聖書の事実というのはいつも現在の事実なんです。いつも現在化する。現在化の事実であり、また現在化の預言である。だから、過去と未来がみなここにおいて現在化してくる。どうして、それが現在化できるかという、如何にして可能かは、もう少し先にいつてからお話します。

### ●死の関門も突破

そういう、

「死の陰の谷を歩むとも、どんなことに、いつ死にでつくわそうとも、恐れない。あなたが私と一緒にいらつしやるから」

と。たとえば、死という所を現実に通らなくてはならなくても、それが決して滅びにはなら



ないと。死の関門も突破ということ。

今、私は「提言」という冊子にヒルティのことをずつと書いてますが、来月号には「超越的希望」というのを書きましたから、どうぞご覧ください。

私はこの詩篇の中で、ある意味において、ここが一番力強いところだと思う。もつともそればかりとは言えないけれども、とにかく、死というのは私たちにとっては決定的なあるひとつの関門だから。

4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ。

なんじ我とともに在<sup>いま</sup>せばなり。

と。即ち、「汝われと共にいます」ということは、これが

「我なんじと共に」

「汝われと共に」

という。この関係は常に、常恒的でなくてはいかん。単なる単独ではない。どんなに孤独であろうとも、一人であろうと、

「神さまは私と一緒に、私は神さまと一緒に」

と。旧約の世界ではキリストは出てこない。それはしょうがないよ。キリストは新約になって現れたんだから。私たちにとって、「神さまは私と一緒に」ということは具体的には、

「キリストが私と一緒に、私はキリストと一緒に」

ということ。どうぞ、皆さんお一人ひとりがこの「キリストと共に」と。「汝」というのは、キリストであり、神である。「神」といったって、これは困るですよ、分からないんだから。キリストがはつきりと神さまとして捕まえられた、その神はいちばんキリストにおいてはつきり分かるんですから。だから、

「イエス・キリストは我らと共に」

と。ある意味においては、神さままでは畏れおおすぎて困るよ。こっちはもうしょうがない野郎だから。しょうがない野郎と一緒にいてくださるのはキリストなんだから。キリストは、私たちがどんな野郎であつても、片一方の盗賊でも、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

なんて仰つてくださるかただから。最後の瞬間に、「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」と。キリストと共にパラダイスに入ったのは、非常に立派なひとではなかった。いちばん悪いやつだった。どうにもならない、地獄往きのやつが天国へ往つてしまった。地獄に落ちてゆく途中からキリストにスーッと方向転換されて、キリストと一緒に天界に入ってしまった。これは最高の恵みですよ。これが福音の世界です。

詩篇第一篇だったら、悪しき者は、本当は落っこちてしまう。人殺しなんかしたり悪いことをしたらしい。これはもう地獄往きだが、悪しき者は滅びないんだ。この悪しき者を救つてしまった。悪しき者、病める者、どうにもならない者をキリストは救わんとして来た。



だから、旧約のそれだけではどうにもならん。

4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ。

なんじ我とともに在せばなり。

とにかく、今日は旧約の世界ですから、「共に」ということをしつかり捕まえてください。「共に」「一緒に」と。やはり、皆さんはどこかへ行くときには、お友だちと一緒にいきたいわけですよ。このキリストというお友だち。これは絶対に裏切らないです、この友だちは。神さまでは恐れおいから、まあ仕方がない、これはどうしてもキリストを持ってこざるをえないですから、私みたいなやつは。

「キリスト、汝はわれと共にいませばなり」

と。ありがたくてしょうがないです、ありがたくて。

### ●油注がれたる者

なんじの答なんじの杖われを慰む。

「<sup>しもと</sup>答」と「杖」というのは、二通りありまして、「<sup>しもと</sup>答」の方は先に鉄の金具が付いていて、狼やなんか来たら、そいつでやつつける。武器です。「杖」の方は、いろいろ

「あっちへ行くんだ、こっちへ行くんだ」

と導いて指図してくれるところの杖です。そういう二つ持っている。導くための杖と、それから盗賊や猛獣を防御するための杖。だから、

「汝の<sup>しもと</sup>答、汝の杖、われを慰む。死の陰を通っても大丈夫、護られるから」

と。「護り」のことを非常に徹底的にいつているのは詩篇121篇です。

「昼も夜もいつでも神さまは護ってくださいっている」

と。これは地獄。今度は何が出てくるか。

5 なんじわが<sup>あだ</sup>仇のまえに我がために<sup>えん</sup>筵をもうけ、

わが<sup>かしら</sup>首にあぶらをそそぎたもう。

わが<sup>さかずき</sup>酒杯はあふるるなり。

戦いの世界だからね。仇の前に筵を設けると。これは煉獄だ。ダンテの「天国」と「地獄」と「煉獄」がここに出てくるわけだ。

「仇の前にわがために筵を設けて、そしておいに慰めまた力を与えてくださる」というわけだ。その筵はどういう力を与えるかというところ、

わが<sup>かしら</sup>首にあぶらをそそぎたもう。わが<sup>さかずき</sup>酒杯はあふるるなり。

と。「あぶらをそそぐ」という。「油注がれたる者」というのは「メシヤ」ということ。「メシヤ」というのは「油注がれたる者」「クリストス」です。

サウルという最初の王様がいましたね。あれはサムエルがこれに油をそそいだ。そしたら、神霊が臨んで、



「何をお前はしても大丈夫だ」

と言われた。サウルは始めは良かったんだけど、ダビデという家来があまりに立派な能力のある家来だものだから、これを妬んだ。そうしたら、その妬みの心と共にサタンの霊に切り替わった。そこでサウルはおかしなことになってしまった。妬み・争いなんていうのは、これはサタンの霊ですから。

その筈でもって何があつたかというと、<sup>かしら</sup>首に油を注がれた。「油を注がれたる者」というのは即ち、神霊が注がれた。霊油だね、これは。

「バプテスマ」という。水に漬ける。悔改めのバプテスマ。洗礼のヨハネは、

「わがあとから来る者は力ある者で、これは霊と火でバプテスマをするひとだ」

とはつきり言っている。キリストの僕になるためにはキリストから霊と火のバプテスマを受けなくてはならない。「火」というのは「霊」のことを別な表現で言っただけのはなしで、霊火ですから。霊火、霊油。要するに聖霊。罪からの潔めと、罪を焼き滅ぼすような気持。「火」の中にはそういう気持もあります。とにかく、そういった聖霊のバプテスマというものは、罪の贖いというものを、罪からの潔めというものを前提としているわけです。その贖い、潔めは、何がしてくれたかというところ、キリストの十字架がしてくれたんです。

だから、キリストと直かにいても、いくら弟子たちでも本当に聖霊を受けるわけにはいかなかった。一時的にはきたさ。けれども、それは本当の意味においては聖霊のバプテスマにはならない。そのことは、キリストは知っていらっしゃる。

「わが受くべきバプテスマ」

とキリストが言われたのは、十字架のことです。

「十字架を受けとって、罪の贖いをしたらば、そうしたらお前たちに楽に聖霊が入ってくる。祈り待っている」

と。それがペンテコステです。

### ●聖霊のバプテスマ

煉獄においての戦い。人生の戦いにおいて勝つためには、聖霊がなければ勝てないんです。「信仰、信仰」なんて言っただけ。私はもう長いこと無教会にいて、無教会では聖霊のことを、時には語るさ。けれども、聖霊のバプテスマのことをはつきり仰らないもの。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、私の無教会の大先生です。だから、無教会はあるひとつの限定、十字架のところまで足踏みしている。十字架を仰いでいるばかりで。内村先生はよく

「十字架を仰ぎみる」

と言っている。でも、「仰ぎみる」だけでは困るんですよ、本当は。パウロさんと同じに、

「われキリストと共に十字架せられたり」

というところに来なければ。



「もはや生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

ということは何かというと、御霊のキリスト、聖霊のことです。だから、あの言葉は無教会でもおおいに引用する言葉なんだけれども、本当は浮いてしまっているんだな。私は無教会の本流にいたからよく知っているんです。

手島さんはとにかく山に籠もって祈った。あれも無教会の流れにいて、

### 「無教会、無教会」

と終わりまで言っていた。けれども、聖霊のバプテスマを受けた。私もちょうど手島さんと一緒に阿蘇でもって受けた。もちろん、手島さんの方がちよつと先です。なにも私は手島さんに按手してもらって、聖霊を受けたのではない。私は祈っているうちにそうなってしまう。この御霊のバプテスマを受けて正直、ガラリ次元が違ってしまった。今までの無教会の信仰はベールがかかっていた。何か足りないと思っていたが、これだった。もうこれははつきりしています。使徒たちはみな聖霊を受けて本当に立ち上がったんです。

### 「キリストが復活した。だから、うれしい」

なんて立ち上がったって、そんなものはダメなんです、それくらいのことでは。それは「キリストが復活した」といって喜んださ。けれども今度は、聖霊を受けなかつたら、その飲**び**はぬか飲**び**になつてしまう。

実はペンテコステが我々にとつてはいちばん大事なことです、クリスチャンにとつては。クリスマスよりも復活節よりもっと大事なものは、聖霊降臨のこのペンテコステなんです。ところが、このペンテコステをいい加減にしているね、みんな。聖霊についていくら語つてもダメですよ、聖霊の**中**から響いてこなければ。

どうぞ、皆さんはぜひとも御霊のバプテスマを——私が受けさせるのも何でもない——皆さん一人ひとり、キリストから直接に受けとってください。そのお助けはしますよ、私は。お助けはしますけれども。

### ●われという酒杯

わが首にあぶらをそそぎたもう。わが酒杯はあふるるなり。

その霊油で溢れてしまったと。もし「霊油」というならば、「わが酒杯」とは「われという酒杯」ということです。われというこの全存在が即ち神さまの酒杯になった。それだから、全身に御霊が満ちてきた。それがこの23篇の5節の極めて、ある意味においてこれが中心です。我という酒杯が神の霊で溢れる。

私たちの全存在は空気でもって包まれ、空気を吸って、血が潔められながら生きているでしょ。空気は身体にとつて絶対に必要だ。我々の魂にとつても絶対に必要なものがあるわけです。それは神の気、神気なんです。この神気が即ち、聖霊なんです。

### 「天地正大の気」



というけれども、この天地正大の気の実質は本当は、神さまの霊気なんです。

それでは、この霊気はどうするか。これはキリストがくださる。それは十字架を通らなければダメですよ。キリストの十字架の贖いです。キリストの十字架というものは私たちの罪を——「我の罪を」ではないですよ、

「我という罪びとを」

なんです——我という罪びとそのものを贖いとしてしまつて、

「もう何も心配いらんぞ」

と。あいかわらず自我があるでしょう、人間は死にいたるまで。しょうがないんだよ、これ。だから、罪びとだというんだ。「私は罪びとでない」なんて言つたつてダメですよ。どんなことがあつたつて、死にいたるまでは我々は罪びとにすぎない。パウロは、

「我は罪びとの首なり」<sup>かしら</sup>

なんて、彼は救われてもそう言つた。それ自身はダメなんです。相対的にはいくら善くなつたつてダメなんです。これはキリストが仰つたとおり、

「ひと新たに生まれずば、神の国に入ることができない」

と。「新たに生まれる」とは、

「旧き我に死ぬ」

ということ。「旧き我に死ぬ」といつて、「さあ大死一番!」といつて、一生懸命で冥想したり、頑張つたりしたつて、くたびれてしまふよ、そんなのは。またノソノソと起き上がつてくる(笑)。

そういう相対的な人間を、自分というものを、どうぞ問題にしないでください。

「自分の信仰がどうだ、自分の実存がどうだ」

とか、

「あの人はまだあれだから、クリスチャンなんていつたつて、いい加減だ」

とかね、人のことばかり見たり。そんなことをやつたつて、自分を見たつて、人を見たつて、どうにもならないんです。

キリストを見てください。キリストは、我々のその相対的な善悪の——さっきの詩篇1篇とは今度はちがうですよ——詩篇1篇の善悪は大したことはない。決してけなすわけはありませんけれども、もうひとつ次元がちがう。そうしたらば、もう善悪の彼岸なんです。そういうことは問題にしたつて始まらないから、最も絶対的な世界に入りましようということ。絶対的な世界というのは条件がいらない。絶対的な世界というのは無条件の世界ですから。

### ●十字架という門に体当たり

「無条件に私はお前を贖いをつたから、過去の汝も、現在のお前も、未来のお前も、



もう心配するな。そのままでもいいんだ」

と。「そのままでもいい」ということは、そのままに放っておくということではない。

「そのままでもいいから、入ってこい。そうしたらば、もう既に根底から贖いとられているから、もの凄いものがお前の中に入ってくるぞ」

と。これが聖霊です。十字架というこの門を、贖いの門を通りますと——私がいつも書いている通りで、「門構えに十」の字を書く。

「閉」

この「十」を忘れては困る。

「我は門なり」

というのはこういう門ですから——十字架という門に体当たりして、

「叩けよ、さらば開かれん」

とは、「体当たりせよ」ということ。手で叩いたってダメです、体当たりしなければ。

「体当たりせよ、さらば開かれん。ぶつ倒れてみる、そうしたらば、実は開かれていたんぞ」

ということ。そして、その向こう側は狭きところではない。十字架という狭き門を通ると、向こうは広大無辺なところですよ。詩篇23篇の「緑の野、憩いの汀」なんです、向こう側は霊気が満ちているところの緑の野、憩いの汀なんです。私はいつか冥想していたら、本当にそういう所に、そういう光景の中に入って行つたよ。

そうしたら、そこはもう聖霊が満ちていますから、聖霊のバプテスマを受けざるをえないんです。だから、

「十字架と聖霊は離すことができない」

と言っているんです。無条件なんだから。無条件に聖霊はくるんだから。何か難しいことでも何でもないですよ。十字架を本当に受けて、

「もう、私はすっかりそんな問題(罪)はないんです。ああ、ありがとうございます」

と、平伏してごらんなさい。何かしらんけれども、そこですが素晴らしい世界に入っていく。自己からぬけてしまっていますから、こだわりがなくなります。そこで、「主さま！」と呼んでごらんなさい。御霊の世界が豁然<sup>かつぜん</sup>としてやってくるから。いや実は、もうその中に入っていたことに気がつく。そんなもんですよ。気がついていただきたい。何も難しくはない。これほど易行道なことはない。努力精進何もいらん。

これは親鸞の『歎異抄』の精神がそういう角度で、あの歎異抄というのは素晴らしい。

「悪人こそ救われる」

というんだから。ダメなやつこそ、自分があるがままでもってキリストにぶつかってきたら、無条件に入れるんです。

「お前はこんな悪いことをしやがったからダメだ。何回こういうわけだからダメだ」



なんて、決して仰らない。人間は言うよ、すぐ。「ああだ、こうだ」と、人のことを。そういうこと言っている人は、いつまでたつても本当の世界に入れないですよ、人のことをいろんなことを言っている人は。もうこれははつきり事実が証明する。もう一対一でもってキリストの中にそういうようにして入ってください。これはとても楽しい。だから、私は楽だという。ラクダではありませんけれども(笑)。ラクダくらいに砂漠も歩けるよな。渴かざるところの水をいただいているから。

## ●二即一の信交の世界

だから、この「わが首に油を<sup>かしら</sup>」と。われという酒杯<sup>さかずき</sup>は、神の御霊の水でもって溢れる。聖霊は水といわれたり、火といわれたりする。一向差し支えない。これは永遠の火で、決して消えない。どんなに嵐がきましても、この灯火<sup>ともしび</sup>は消えない。そこの灯台やこういう電灯なんか具合がわるくなったりするけれども。我々の中のこの聖霊の火は、

### 「汝らは世の光なり」

というのは、御霊の光が光っているんです。御霊の光が光っているから本当に世の光となる。どんなに世の中が絶望的になろうが、混乱になろうが、びくともしない。そんなことでもって動じない。何人悪いやつがいても、なにも恐いことはない、何人いようが。こちらは単騎で、一人で一向差し支えない。本当の勇者は、

### 「強者は一人ある時に最も強し」

という。これはシラーの「ウィルヘルム・テル」の劇の中の有名な句です。本当の強者は一人ある時に最も強い。それはキリストの霊が入っているから。衆を頼んでいるやつはろくなことはない。歴史は一が動かす。あなた方は、どんな乙女であっても、一人の乙女が動かしますよ。

### 「歴史は女がつくる」

なんていう言葉もあるくらいだから。

誰でもが掛け替えのない存在なんです。相対的な「能力がどうだ」なんて、そんな問題ではない。キリストが入ってきたらもう、皆さん一人びとりが天下一品、全世界を相手にすることができ。本当ですよ。御霊の祈りの世界に充滿して、

### 「一粒の芥子種」

というのは、あなた方一人びとりが本当の原始力なわけだ。原始の力が入ってくる。それは原子爆弾が爆発したつて、我々の肉体がすつとんだつて、我々の存在はすつとびませんよ。ですから、もう信仰というなら、それだけの強さを持たなければつまらないです。いい加減な信仰はやめた方がいい。

信じ仰いでいるのではないんです、信仰というのは。神さまを信じ、キリストと信の交わりの中に入っている。



「汝(神) われと共に」(詩篇23)

「我(神) なんじと共に」(出エジプト3)

というのは、この交わりの世界、「信交」の世界です。二にして一なんです。「汝われと共に」のこの「共に」は、二にして一、二即一なんです。なぜ一かというと、

「あなたの中に聖霊がある。私の中にも聖霊がある」

という、この「聖霊がある」ので、二にして一ということがいえるわけです。うちに聖霊を宿すから。「共に」がただ「共に」でなくなってしまった、今度は。「の中」に入ってくる世界です。なぜ「中に」かというと、そこに共通なるものがあるから。汝は汝なんだ、どこまでも。我は我なんだ、はつきり。だけれども、これが一つだというのは、ここに共通な聖霊があるから。だから、パウロも、

「われキリストのうちに、我なんじのうちに」

「われ彼のうちに、彼わがうちに」

と言っているのは、この「うちに」の世界は何かというと、パウロが「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、「神」と言おうが、あれはもうみんな通じている。分析する世界ではないんですから。

### ●我は神の宮とならん

詩篇は、この「わが、わが」というときに、あなた方一人びとりの本当に歌ですから、詩篇23篇が自分の歌にならなかったらダメです、

「これは私の歌ですよ」

と。これはダビデの作だけれども、一人びとりの作で、あなた方はその終わりに自分の名前を書いておいたらいい。そういうくらいに。

6 わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。

「我を追究する」という言い方をしている。「恩恵と憐憫」とは同じような言葉です。要するに「恩恵と憐憫」とは愛。神さまの愛は徹底的に我を追求してくださっている。

我は永遠にエホバの宮に住まん。

と。「宮に住まん」ではない。

「我は永遠にエホバの宮とならん」

なんです。そうは書いてないよ、書いてないけれども、そう読むんだ。旧約では「宮に住まん」という、エルサレムの宮に。だけれども、新約では黙示録に

「そこには神の宮、神殿はなかった。神と羔しかなくて、それが神殿である」

というような言い方がしてある。だから、「エホバの宮とならん」です。パウロが、

「汝らは神の宮である」

と書簡の中で言っている。そのとおり、我々が活ける宮、活ける神殿。キリストが活ける



神殿でした。だから、

「エルサレムの神殿が壊れても、私は三日で建てる」

と言ったのは、

「三日目に私は甦る」

ということ。「三日で建てる」と言われた。

「私が神殿だよ」

ということ。無教会は

「教会はなくてもいい」

なんて、ただそんなことを言っただけでダメだよ。教会は有ったって無くたっていいよ。本当の神殿は、本当の教会は自分自身がそうです、自分自身が、『教会の誤解』というブルンナーさんの本を読んでごらん下さい。いわゆる教会はダメだから、ブルンナーさんはあれを書いたら、教会の人に憎まれたらしいね。けれども、ダメだよ、あれは真理だから本当にブルンナーさんは

「聖霊が宿っていない教会は教会ではありません」

とはつきり言っただけ。活ける御霊の存在は即ち、活ける宮、活ける神殿です。ここは

「我は永遠に神さまの宮とならん」

と。これで詩篇23篇は新約の光でもつてはつきり読んだわけです。

### ●現在化と天国化

天国・地獄・煉獄、どれにも対処して大丈夫。だから、運命環境はどう変わっていいかが、絶対に大丈夫。皆さん、いわゆる幸・不幸なんてものは、そんなものはない問題じゃないですよ、この世の幸・不幸なんてものは。本当の幸いは「汝われと共に」という世界。「我なんじと共に」という世界。これが本当の幸いの世界です。キリストと一緒にいないところにはひとつも本当の幸いはありません。どんなに幸いのようにみえても、そいつは滅びていく。それは空しい。もううれしくてしょうがないじゃないですか、キリストと一緒にいたら、滑っても転んでも、平伏して

「主さまー」

と言っただけでいい。

この十字架が立っているかぎり、人間は傲慢になれない。人間がもし傲慢になったら、それは十字架が消えている証拠です。キリストの十字架は、自分の身を捨ててまでも、私の身代わりになってくださったのがこの十字架です。旧約の宗教ではとにかく、疵なき動物を犠牲にして、罪の身代わりになった。それを今度はキリスト自身が即ち、羔となり、大祭司となったんだから。そして、あの最後の晩餐の、

「わが血を飲め、わが肉を食え」



というのは、これは十字架の中にもあるけれども、流された血をただ飲むというような、ちよつと妙な神秘的なことではない。それはキリストの十字架の贖いを受けて、聖霊がくれば、「聖霊を受けとる」ことが即ち、「わが血を飲み、わが肉を食らう」という内容なんです。即ち、聖霊はそのようなキリストの永遠の生命を宿しているところの霊ですから。

そういう意味において、十字架が立っているかぎり、私たちは本当に平伏さざるを得ない。平伏して、本当にキリストの十字架のあとに聖霊が来れば、これは權威なんです。平伏しと權威なんです、十字架と聖霊は。だから、御霊のある者が本当の權威を持つ。しかし、それは十字架がちゃんとそこにあるから、決して傲慢にはならない。

そのような事態をもつて非常に楽なんです。何も無い。だから、私は「無」という。「無者」です。無者の最大のお手本は、誰あろう、イエス・キリストなんです。キリストが神さまの前に本当に平伏していったんだ。

詩篇23篇は、私たちにいかなる、天国であろうと、地獄であろうと、煉獄であろうと、それを本当の天国に、相対的なものを本当の天国化して、過去も未来も本当の現在化して、現在、今ここにおいて常に天国があるという世界。それが即ち、永遠を常に持っているということなんです。そしたら、

「神の国がいつきても、自分がいつぶつ倒れても、アーメン・ハレルヤー！」  
というわけです。そこまで徹底してごらんさいよ。なにかしらんけれども、全存在に力がくるから。

### ●絶対的なものにしがみつかなくては

姓名判断とか、生年月日の判断とか、なかなかあれは当たるんだね。私もびつくりしちゃうんだよ。あの易は<sup>えき</sup>ばかにならない。けれども、あれは宿命的なことじゃなくて、そういう波がある。けれども、それに対してどう処していくかということは、これは信仰の世界で、信仰はその波に自在に処していくことができる。易も参考にしたっていいよ。けれども、易に凝ったらダメだよ。信仰でもって必ずそれに勝つていきます。キリストはもう我々の一切相対的なものを——もつと徹底的なことはまた明日お話ししますけれども——私みたいなのは、そういう絶対的な世界を持たなければやりきれないから、いい加減なことでは。私は、

「よくみんないい加減なことで済んでいるな、えらいな」

と思っているけれども、私はいい加減なことでは済まないのじゃない。そういう、しょうがない男なんだ。というのは、私は立派じゃないから。立派な人は適当なところで済んでいる。立派でないものだから、絶対的なものにしがみつかなければどうにもならない。牧師さんや神学者はみんなお偉いですよね。私の先生方もみんな偉いから。おおよそ偉くないダメな簡単なバカ者がこの福音に捕まえられた。けれども、ありがたいことには、絶対的な世界をつかまえると、相対的な偉きなんてものはおおよそ問題でなくなってしまう。



「ちゃんちゃらおかしい」なんて言ったらわるいけれども(笑)。

それは神さまの、太陽の光の前にはこういう光をいくら光らせたって、野球のナイターの照明がいくら光ったって、太陽が出て照ってくればダメですよ。絶対の光、霊界の太陽であるキリストの中に入ったら。

今日は、詩篇23篇をとにかく私たちの自分の歌として、この「エホバ」のところをみんな「キリスト」に切り替えて読んでごらん、「汝、主さま!」と言つて。どんなことがあつても、私たちと共にいてくださるから。

「インマヌエル」「神われらと共に」というが、このキリストと皆さん一人びとりが本当に「共に」になるときに今度は、お互いが本当に「共に」になる。絶対的なものをつかまない人と、「共に」なんていったって、当てにならない。当てにならないから、

「では、しょうがないか」

というのではない。当てにならないやつをなお相手にして、こっただけは当てになるとやっていると、向こうが

「あれは凄いな」

といつて当てにしてくる。というのは、その凄さは何かというと、自分の凄さではない。キリストの凄さだ。だから、本当に信頼できる人はこのキリストを持つている人なんです。

どうぞ、そういうことで、何かしらんけれども、落ち着きが出てきたでしょ。もう何も問題がなくなつたでしょ。肉体的な問題でも、あるいは何かいろんな問題が、結婚問題やなんだかんだといろいろあるよね、若い人は。

集会ごとに、とにかくそうやって乗り越えていくんです。そうすると、パツと電車の中でもどこでも、パツとその世界に入れますから。そうすると、本当のシャローームです。「シャローーム」というのは「平安」ということ。平和ではない。平和なんてのは当てにならない。平安です。ここ京都は平安神宮があるからね、よくお参りしてくださいよ。本当の平安は、

「我は平安神宮なり」

と——京都ではない——皆さん一人びとりが本当の平安神宮だ。京都の平安神宮よりも素晴らしいんだ、あなた方一人びとりは。そういう「平安神宮」になつて進んでいくことです。

「エホバの宮とならん」

というのがそのことです。終わります。

## ●祈り

イスラエルの歴史を通して懇ろに導き、牧者のごとくイスラエルの民を、またその一人びとりを導いて、彼らの惨憺たる現実にもなお、いよいよあなたは顧みをあつくし——イスラエルの国は北イスラエル・南ユダの両邦がアッシリヤ・バビロニヤに滅ぼされ、また捕囚をうけたあとに——無名の預言者第二イザヤを通して、あなたは深刻な贖いの音信を



伝えてくださいました。実に、あなたはまことにいまし給うところの神さまです。

この歴史は、キリストの「父よ」と呼ばれた神さまで、本当にありがとうございます。この主イエス・キリストが今もお活きて天界にあり、また自在に遍在し給う。そして、私たちの中に聖霊として臨んでくださり、まことに感謝であります。

いずこにおいても、ありありとキリストは、主さま、あなたは「我なんじと共に」と仰つてくださるから、どこにおいてもその時に、「主さま！」と呼びかければ、あなたが傍らに立ちてありたもう。本当に主さま、私たちはあなたのみ腕によつて守られ、また導かれ、強められ、み光をいただいて光となり、また本当に生命をいただいて生命となり、愛をいただいて愛となります。感謝であります。

私たちの中に御霊として宿り、また私たちと共に、「我なんじと共に」として現実になり給うところの主さま。復活の主さま、あなたは自在に現れ給いました。エマオ途上においてもあの通りでした。また使徒たちが集まっている所に、戸が閉じていてもなお入ってきて、食物を共になさってくださいました。主さま、私たちはそのようにして、あなたをありありと現実になら、この傍らにまた歩く先に、わが後から、カンテラを灯して、み光をもつて照らしてください、そのようなあなたと共に、私たちは本当の現実を歩かしていただくことを本当に感謝いたします。

詩篇23篇は私たちの歌です。一人びとりがこれを本当に生涯の歌として、

「**あなたを油そそがれ、われという酒杯は溢るるなり**」

と、聖名をたたえつつ進んでいきます。そして、人々にこの酒杯を分かち与え、

「ああ何とこれは驚くべき歓喜の酒杯であるか。生命の酒杯であるか」

と。私たちはいつものような所も緑の野、憩いの汀と化せられて進んでいくところの天国的現実を周りに展開していくような、私たち自身が即ち天国体とされて進んで参ります。

およそこのようにして兄弟姉妹たちは一人びとりが驚くべきあなたをみ光の存在として、いよいよあなたが充滿してくださるように切に願ひ奉ります。

かくして本当に——私たちは自分なんか問題ではありません——あなたが一切であるから、一人びとりを通して掛け替えのないことをあなたがなし給うことを信じ、聖名のゆえに全てがなっていくことを信じて、聖名を讃え奉ります。

どうぞ、この集会が明日も明後日も、あなたが全的にこれを導き、すべて来たれる者が「アーメン・ハレルヤー！」をもつて散じ、そして、そこそこにおいて本当にあなたの証し人として立てたまわんことを切に願ひ奉る。

今、心からの感謝と讃美、希望、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉ります。アーメン。

